おおさか KEYわーど 第20回

大正時代の大阪人の見た〝未来〟

―平成の大阪人の見る〝未来〟は

写真：現在の市庁舎屋上にある「みおつくしの鐘」

“過去はいつも新しく、未来はつねに懐かしい”―写真家・森山大道さんのエッセイ・対談集（青弓社）の題名だが、けだし名言である。

歴史をふりかえって大昔と思っていた時代が、現代以上に新鮮に見えることがある。戦前のモダニズムのファッション、建築、美術など、洗練されていて伸びやかで明るい。対して“未来”は、膨大な“過去”と進行中の“現在”から誕生するものである。理屈っぽく言えば、今日の私たちの努力や活動が積み重なって、やがて“未来”という姿で出現するのである。

映画にもなった漫画「20世紀少年」のモチーフである昭和45（1970）年の大阪万博では、携帯電話、FAX、リニアモーターカー、電気自動車、巨大エアドーム、動く歩道、缶コーヒーなどが新技術として初めて登場した。万博を記憶する世代にしてみれば、こうした新技術の登場は、さらなる“未来”の社会を予想させると同時に、それらが実用化された“未来”である現代社会においては、万博の懐かしい記憶へと引き戻すのである。

平成23（2011）年は「大正100年」という記念の年であった。昭和43（1968）年の「明治100年」では華々しくイベントが開かれ、出版物も多かったと記憶するが、「大正100年」は盛り上がらなかった印象がある。しかし、わずか15年間の大正時代だが、世界が激動した時代であった。大正元（1912）年の中華民国成立、大正3年に第一次世界大戦、大正6年にロシア革命がおき、大正9年に国際連盟が設立される。日本は大正12年の関東大震災で壊滅的な打撃を受けるが、いわゆる「大正デモクラシー」が進み、大正14年に普通選挙法が制定される。

大阪に限っても大正は重要な時代だった。明治22（1889）年より市政（特例）が施行された大阪市は近代都市へと発展し、大正14（1925）年の第二次市域拡大で、人口・面積において東京市を抜いて日本第1、世界第6位のマンモス都市“大大阪”へと膨張する。大正末から昭和10年頃にかけて、大胆な都市計画が推進され、現代に至る都市基盤が築かれていくのだが、“大大阪”建設の準備が進められたのが大正時代であった。

大正時代竣工の建築をあげると、大正7年に中之島の大阪市中央公会堂、大正10年に中之島の現在地に新しい大阪市庁舎が竣工する。表紙中央の絵葉書は、この時に竣工した先代の市庁舎で、欧米都市の庁舎にも比肩する堂々たる建築である。中央の塔には後に「みおつくしの鐘」がつり下げられた。“大大阪”誕生の翌大正15年、府も新庁舎を大手前に竣工させた。結果的に昭和11年にずれこんだが、天王寺公園の大阪市立美術館も、大正9年の市議会で建設を議決して当初の開館予定は大正12年頃であった。

大正時代の大阪は、現代の目からもダイナミックで新鮮である。確かに“過去はいつも新しく”と言いたくなる。では、当時の大阪人は、どんな“未来”を夢見ていたのだろう。そして大正100年から明けて大正101年となる平成24年を迎え、様々な問題をかかえた現代の大阪人は、“未来”になにを見ようとしているのか。それもまた、よい意味での懐かしい“未来”なのだろうか…。

筆者プロフィール
橋爪 節也 はしづめ せつや
大阪大学総合学術博物館館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室主任学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念　木村蒹葭堂―なにわ　知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念　佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の幻像―』（創元社）など。